
Sabotage

紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sabotage

【Zマーク】

Z5968B

【作者名】

紫苑

【あらすじ】

特別徴兵選出法　捕まれば強制兵役。相手は訓練された兵士。
人生を左右する6時間が始まる。

プロローグ

暗い廃ビルの中。1人の女性と3人の男が“取り引き”をしていた。壊れかけた机の上に座っている赤髪の男と、埃を被ったソファーに寝ころんでいる黒髪の小さい男。そして女性と向き合って話している長身の黒髪の男。唯一の共通点は3人共とても若いことだった。

「今回はどうなんだ？」

長身の男が口を開いた。この3人の倍ぐらい歳を取っていると思われる女性は、手に持つていた資料を長身の男に渡した。

「埼玉私立城石高校。生徒数325人だ」

10枚ぐらいある書類に目を通している長身の男に向かって女性は言った。

「300人つて……。少ないね。大丈夫かな？」

一番小さな男がソファーに寝転んだまま言った。

「知るか。つか、浅川さん。俺ら2週間前に仕事したばっかなんだけど

机に座っていた赤髪の男が、長身の男の後ろから資料を覗き込みながら言った。

「そう言つた。依頼があるつてのは良いことじゃないか」

「あんたらにとつてはな」

長身の男が資料から目を離し浅川と呼ばれた女性のほうをまっすぐ見ていた。

浅川はその言葉には何も返さず軽くため息をつくと続けた。

「その代わり今回の潜伏期間は3日だ。制服などは送つておいたからな。あとは資料に書いてあるからよろしく

そしてそのまま何も言わずにビルを出て行つた。

「俺らはいつまで飼い犬なんかねえ」

赤髪の男が苦笑いに似た表情を浮かべながらどことなくそう呴いていた。

第1話　一日の始まり

埼玉私立城石高校　高校なのに3クラスしかない小規模な学校だが、県内有数の進学校で有名なこの高校。そこに通う生徒であり、わずかに茶色に染まっている肩まである髪と、女子高生にしてはがつちりとした体つきである　滝沢未来はいつものように登校していた。

「おっはよん！」

2・5と書かれた教室に入るなり、大声でいつものように周囲の人間に挨拶をした未来。周囲の生徒たちもいつものように返答をし、教室の至る所から声が上がった。

「おはよう」

未来は先ほどより気持ちのこもった挨拶を真ん中の席で勉強していた女子生徒に向かつて言つた。

「あ、おはよ」

初めて未来の姿に気づいたかのように顔を上げた痩せた体つきの生徒　梨田友香は微笑みながら返事を返した。バスケ部エースの未来と、学力トップの友香という2人合わせれば文武両道なこの2人は普段から仲が良かつた。

そのままいつものように2人がたわいない会話をしていると、突然放送が鳴つた。

「全校生徒の皆さん。緊急集会を開くので今すぐ第一体育館に集まつて下さい」

放送部の声ではないことは明らかだった。

「何だろ？」

一瞬静まり返つた教室がざわつく中、友香は不安げに聞いてきた。

「分かんない。とりあえず行こつか？」

未来はそう言いながら立ち上がっていた。

始業間際でほとんどの生徒が登校していたためか、廊下に出ると各教室から出て来た生徒たちでごった返していた。

「こういう時、少人数校だなんて思えないよね」

紺色のブレザーの集団の中に混じって体育館に向かつ中、未来が友香に話しかけた。が、ぼーっと一点を見つめている友香は、曖昧に返事しただけだった。

「どうしたの？」

それを不振に思った未来は友香の顔を覗き込みながら言った。

「ん、あ、いや、あの人たち誰かなって思って……」

そう言つた友香は3人の男子生徒を指差していた。新しい感じがする制服もそうだが、赤髪・長身・チビという異色トリオが目に付いた。特に半分以上の生徒が髪を染めているこの学校でも、赤とうか赤茶色に染めている人間はいなかつたせいで余計目立つて見えた。その上、3人とも学校内で見かけたことがないとなれば、気になるのは当たり前だろう。

にしても、友香つて一点に集中すると周り見えなくなるんだよね。

そう思いながら、未来は「転校生だよ」と答えた。

「赤っぽい髪のが萩原涼。小さいのが市川昇。大きいのが武村隼人。3人とも2組だよ」

すんなり答えられたのは、1回だけバスケ部の練習を見に来た3人と話したことがあつたからだった。話してみると気さくで良い人たちだった。

そんなことを考えながら体育館に入った未来達だったが、入った瞬間わざわざ呼び出された理由を全て理解した。

体育館の中は迷彩服を着た兵士たちで包囲されていたからだ。

特別徴兵選出法

15～18歳の男女共学校全てに権利があり、全校生徒は6時間用意された兵士30名から逃げ切らなくてはならない。

逃げ切ることが出来たならば、その者は自衛能力があるとし、徴兵から間のがれるが、捕まつた者はその日から2年間の徴兵を課せられる。一年につき全国20校で行われる。徴兵中も高校の勉強は教えてもらうことができる、大学・企業も学生兵士枠というのがあるため、そのまま社会復帰できるというもの。5年前から始まつたこの法令は、表向きは自衛能力がどうとか言つてゐるが、実際は人不足の自衛隊をどうにかしたいだけだ。ということを未来は他の人間から聞いていた。

そんなどんでもない人不足解消に自分たちが選ばれてしまった。殺されるわけじゃない、でもなんであたし達なんだよ……。未来自身これの存在は知つていたものの、実際に巻き込まれたという人は聞いたことがなかつた。本当にやつてるかどうかすら疑問に思つたほどだ。だがそれは実在している。そして自分たちが巻き込まれている……。

そんなことを未来が考へてゐる中、長官と思われる男性がマイクを使い、既に分かりきつた内容を説明してゐた。

誰も何も話さず 否、話せなかつた。周り中、銃を持つた兵士に囲まれていたからだ。その数はざつとみても、100人近くいるようだつた。おそらく警備やその他の処理のために來てゐるのだろう。

「では、腕輪をはめもらひ」

長官らしき男性の言葉を合図に、適当に列になつてゐた生徒たち1人1人に警備の兵士とは別の兵士が腕輪 厚さ2センチぐらいの銀の腕輪だ。手首側に小さな窪みがついていて、その窪みに兵士たちが持つてゐるチップを差し込むと、特殊な電磁波が流れて一時的

に氣絶する仕組みらしい。をはめていた。

未来も友香も当然抵抗することは出来ず、ただ腕輪をはめられた。

「もう一度言う。その腕輪に電磁波が流された瞬間からその者は兵士となる。腕輪にはＩＣチップが組み込まれているので、居場所や生存状況まで全てこちらで把握させて貰っているからな。また、携帯は使えない。では、5分後　　9時半から開始する。終了予定期は3時半だ」

こうして人生を左右する一日が始まった

第2話 救済

5分後。未来たちは3階にいた。一斉に逃げ出した生徒たちはそれぞれ部室や校庭や校舎内に別れたため、予想以上に校舎内にいる生徒の数は少なかつた。事実未来たちがいる3階にも、10人ぐらいいの生徒達しかいなかつた。

「みんなどこにいるんだろうね」

とりあえず廊下の窓枠にもたれかかつた所で友香はしみじみと言つた。

「大丈夫。たつた6時間だよ？ 300人対30人だし、みんな逃げ切れるっしょ」

未来は他人のことを心配する余裕がなかつた。とにかく逃げる。今 の未来の頭にはそれしかなかつた。

そのときだつた。

「いやああーーー！」

静まり返つていた廊下に女子生徒の叫び声が響いた。同時に曲がり角から姿を見せる女子生徒。靴から判断するに3年生だろう。

たがそれを追いかけて曲がり角を曲がつて来た兵士は2人 上下

青い服を着ており、体育館にいた兵士たちとは違うオーラがあつた。

「助けて！ 助けてよーーー！」

どうしようか考える暇はなかつた。女子生徒は後ろから来た兵士たちに取り押さえられ、兵士の1人が首から下げていた3センチ四方の黒いものを女子生徒の手首 腕輪だ。に差し込むと、それまで暴れていた女子生徒は動かなくなり、再び静寂が訪れた。それら一

連の動作は一瞬の出来事だった。

そこから30メートルぐらい向こうにいる、呆然と立ち尽くしている2人に気づいた兵士たちはそのまま黙つて近づいてきた。幸いまだ冷静でいた未来たちは一瞬顔を見合わせると階段のほうに逃げ出したが、階段の踊場まで降りた瞬間。下から別の兵士2人が上がつて来た。

「ウソ……」

隣にいる友香が震えているのが分かつた。4人の兵士たちは至つて冷静な目でまっすぐ未来たちを捕らえていた。
動けない、声も出せない。嫌だ。助けて。

そんな状況の中、兵士は未来の腕を掴もうとしてきた。その首にかかるチップが黒光りしているのが嫌でも分かつた。
やられる！

思わず身を縮めた未来の腕に触れるか触れないかまで兵士の腕が伸びて来た時だった。兵士は上から来た何者かに吹っ飛ばされていた。

「はい、こんにちは」

未来たちを庇うようにして兵士たちの間に入ったのは、市川晃だった。

間近で並んでみると165センチある未来より小さい。おそらく160センチあるかないかだろう。そんな小柄な晃が階段の上からの飛び蹴りで兵士を吹っ飛ばしたのだった。

しかし晃の乱入で一瞬止まつていた兵士たちは、我に帰ると一斉に晃のほうに襲いかかっていた。

未来は一步も動けず、その場に立ち尽くしていた。が、晃は身軽に兵士たちの拳を交わしながら階段の上のほうを見ながら「手伝つてよっ！」と声を出した。

「ヒカルは女の子相手だとやたら燃えるんだなー」

笑いながらそう言ったのは萩原涼。隣りに武村隼人もいた。

2人は音もたてずに階段の踊場まで飛び降りると、隼人が晃に向かつて「先行け」とだけ言った。

軽く頷いた晃は隙を見て戦闘から抜け出すと、涼と隼人が兵士たち全員を引きつけている中、友香の腕を引っ張り4階まで階段を駆け上がった。友香にしつかり腕を掴まれていた未来もそのまま引っ張られる形で階段を登つて行つた。

下の階で殴り合つ音が聞こえなくなり、校舎内は再び静寂に包まれていた。最上階の一一番端にある、普通の教室の1・5倍ほどの大きさの生物室に連れ込まれた所で晃は友香の腕を離した。

「「めんねー。大丈夫だった？」

教卓の上に座りながら晃はこつこり笑つて言つた。

「ありがとうございました」

未来と友香は同時にそう言いながら頭を下げていた。

「い、いや、いいよ。オレらこれが仕事だし」

恥ずかしそうに顔を背けた晃だったが、ふいに向き直ると説明し始めた。

「オレらは君達を助けるために“これ”に参加したんだよ。より多

くの生徒を助けるのがオレらの仕事。だからお礼なんかいよい

言葉使いも丁寧で髪も長め、おまけに背も小さいので女子と言つてもおかしくない気がした。

「あの、他の2人は大丈夫なんですか？」

友香が遠慮がちに口を開いた。言われてみればそうだった。“仕事”とか言つてたが、見た目からしても恐らく10代。訓練された兵士にかなうとは思えなかつた。

「あー。大丈夫、大丈夫！ あいつらなら4対2でもきつちり気絶させて帰つてくれるよ」

「随分偉そうだな」

戸を開ける音と同時に声がした。見ると涼と隼人が立つていた。

「てへ」

頭を触りながらふざけそう言つた晃。それを見た涼は後ろから「あほっ！」と言いながら晃の頭を叩き、バンと言ひ音が教室中に響き渡つた。

「いつてー。少しは怪我して来てよ」「よ

心にもないことだらうが、晃は頭を抑えながら言つた。

「残念ながら、怪我する前に敵サン気絶しちゃいました」

そう言つた涼の手の中には例のチップが4つ握られていた。

「涼、そろそろ行くぞ」

ずっと黙っていた隼人が涼を促した。同時にそれまで笑つていた涼が急に真顔になつて「はいよ」と言つた。

先ほどの話の推移から行くと、他の生徒を助けに行つたのだろう。ろくな話す暇もなく、教室を出て行つた2人。未来たちはそんな様子をただ突つ立つて見てゐるだけだつた。

「市川君達つて何者ですか？」

友香が聞いた。が、未来は次第に緊張の糸が途切れで来たためか、立っていることに疲れ感じ、近くにあつた椅子を引き寄せて座った。見ると友香も同じようにしていた。

「ただの高校生だよ」

「そんなはずないだろっ！」と突っ込みたくなつた未来だったが、未来が言葉を発する前に友香が続けた。

「私、聞いたことあるんですよ。元兵士が警察と組んで“これ”を邪魔してゐるつて」

笑いながら「まかそうとしていた晃の顔が友香の言葉で一瞬陥しくなつたのが分かつた。

「何それ？　つてか、だめだわ。全然頭がついてけない」

未来は苦笑いしながら言った。先ほどまでは助けてもらつたこともあり、ただ何となく相手の言うことを鵜呑みにしていたが、よくよく冷静になればなるほど、自分たちの目の前にいる人間のことが分からなくなつていた。

何か言おうと口を開きかけた晃だが、ガラツと言つ遠慮がちにドアを開ける音がしたのと同時に、3人の生徒が教室に入つて來た。それを見た晃は、未来たちには何も言わず、相変わらずのテンションで入つて來た生徒たちに未来たちの時と同じような説明をし始めた。多分これから來るであろう生徒たちに毎回説明をしなくてはならないのだろう。

「ねえ、友香が知つてること聞かせてよ

未来は友香の顔を覗き込みながら言った。

「うん。いいよ。ただ本当かは分からないけど……」

そつ控えめに言つと友香は説明し始めた。

第3話 正体

世界中で相次いで起こる戦争により、日本も軍事力を求められるようになつていた。

かと言つて高齢少子化が深刻なため、いきなり徴兵制をとるわけにもいかず、採決されたのが特別徴兵制だつた。

高校生を半ば無理やり兵士にするという法令が採決されるほど、自衛隊が好き勝手出来るのも、時代の流れにより警察より自衛隊の方が優位な位置に立つようになつたからだつた。無論それを面白くな/i警察がルール違反にならないよう邪魔する手段として取られたのが萩原たちを使うこと。

彼ら3人は特別徴兵制に巻き込まれ捕まり実際に2年間兵役を受けた上で、警察に拾われ警察で特別訓練を受け、兵士を上回る実力を身につけた。そして19歳となつた今でも転校生として高校に潜り込み、生徒を助けることを仕事としている

これが未来が友香から聞いた話の内容だつた。

「つてか、友香は何でそんなこと知つてたの？」

未来が素朴な疑問を友香にぶつけた。

「私のお兄ちゃんが警察官でさ、あの人たちと仲良いらしいから…」

恥ずかしそうに下を向きながら友香は言つた。

「ええっ！ 友香の兄ちゃん警察官だつたのー？」

思わず大袈裟過ぎるリアクションを取つてしまつた未来。声が大きかつたためか、教室にいた生徒たちが何人かこちらを振り返つた
未来たちが真剣に話し込んでいる間に、教室の生徒の数は30人前後になつており、実験用の長机の上や、椅子などにそれぞれ座り込んでいた。

「何だ？ 関係者からの情報だったんだ」

急に声をかけられ、思わずビクッとなつた未来達。もちろん声をかけて来たのは晃だつた。が、いつの間にか帰つて来たらしく、隣に涼と隼人もいた。

「す、すみません。私余計なことベラベラと……」

未来達が涼たち3人に見おろされる格好になつてしまつたため、友香は余計重圧を感じたのだろう。長い髪を揺らし、頭を下げながら言つた。

「あんたに責任はないさ。全部事実だしな」

隼人が苦笑いしながら床にドサッと腰を下ろした。それにつられて他の2人も腰を下ろした。

「なあ、ひょっとして梨田友香サン？」

涼が友香と田を合わせながら聞いた。

「そうですけど……。やっぱお兄ちゃん職場でも？」

友香の言葉に答えるものはいなかつた。ただ未来を含めた4人が一斉に笑い出した。

未来も友香の兄のことは知つていた。とにかく妹離れ出来ない兄で、未來自身、実は友香の父親なのではないか。と疑つたことがあるほどだつた。

「うわっ、おまえ等兄弟かよ。何回妹の自慢聞かされたか……」

「オレ死ぬ前に一回は妹さんに会いたかつたんだよね」「でたらめだと思ってたが、それでもなかつたんだな」

涼、晃、隼人が友香を見ながら口々に言つた。友香は恥ずかしさに

耐えきれず、顔を真っ赤にしていた。

「ちょっとあんた達！ 本人いる前で好き勝手言わないでよ」

「お前だつて笑つてただろ？」

思わずフォローに入つた未来だったが、涼にすかさず突つ込まれてしまつた。それには返す言葉もなく黙り込んでしまつた未来を見て友香は笑つていた。

「まあ、悪口じやないよ。オレ警官は嫌いだけど、梨田さんは好きだよ」

晃がまとめ、他の2人も頷いたところでその話は終わった。

「さてと、そろそろ3時間半か 来るかな？」

涼が立ち上がり、窓から外を見ながら先ほどより幾分か真剣な顔で言った。いつの間にか“これ”が始まつてから3時間以上経過していたことに未来は驚きを隠せなかつた。

「来るだらうな」

隼人も立ち上がつていた。

「どうしたの？」

思わず未来が口を開いた。先ほどまで静かだった教室も次第にざわついており、教室全体に不安の色が漂つっていた。

「ヒカル。説明してやつて」

涼がめんどくさそうに目立つ赤髪を搔きながらそう言つたのと、教室の後ろの方から「竹内！」という声があがつたのはほぼ同時だつた。

見ると教室中の殆どの生徒たちが窓越しに中庭を見おろしていた。

「なあ！ あそこで兵士に担がれてるの、俺の後輩なんだよ！ 助けてくれよ！」

先ほど声を上げた男子生徒 男子バスケット部部長の矢野。が、

焦りの表情を浮かべながら涼の制服を掴んでいた。未来自身が女子バスケット部の部長ということもあり、何度も話したことはあったが、いつも穏やかで、とてもこんな大声を出すことがあるとは思つてなかつた。

未来たちも窓に張り付く形で外を見ると、確かに中庭 L字型の校舎の中心。から、2人の男子生徒を両肩に乗せて体育館の方へ向かう兵士の姿が見えた。

「なあ、助けてやつてくれよ。俺たちんとこ助けるのが仕事なんだろ?」

いつまでも何も言わない涼に向かつて矢野は先ほどより大分落ち着いた様子で言った。

身長差のため、すがりつく矢野を黙つて見おろしている涼と、その様子を立つたまま見守つている隼人と、座つている晃。その雰囲気からはとても先ほどまで爆笑してた3人とは思えなかつた。

「ルール聞いてなかつたん? 捕まつた瞬間からあいつは兵士。俺らが助けるのは捕まつてない奴だけ。捕まつたら手は出せねえよ」

ちらつと窓の外を見て状況確認すると、視線を戻し矢野の目をまつすぐ見ながら涼は冷たく言い放つた。

「そんな……。じゃあよ、俺ら以外の奴はみんな助けて貰えないってことか?」

矢野が言った。矢野は普段から大人しい奴だったが、仲間のことになると怒鳴ることもある奴だと言うことを未来は思い出した。

「そうなるな

涼が言った瞬間

「何だよそれ!」

「そんなの聞いてないよ

「みんな助けてよ!」

と教室中から声が上がつた。

うちら以外殆ど捕まる それがどう言つ意味か未来は考えていた。2年である未来にとつてもう一度と同じ仲間とバスケは出来ない。もう一度と同じ仲間と勉強は出来ない。それがどういう意味を示すのか、未来はまだ実感出来なかつた。でも 未来は思つた。こんな方法で自分だけ助かつていいのか？ そんなの自分が逆の立場だつたら絶対許せない。やっぱりみんな一緒に助かりたい。

未来はそう思いつつもその思いを声に出すことは出来なかつた。涼たちを責めることは未来には出来なかつた。隣にいる友香も黙つたままだつた。

しばらく生徒たちが騒いでいるのを黙つて聞いていた涼だが、ふいに矢野が制服を掴んでいた腕を振り払うと、2・3歩前に出た。

「つるせえんだよっ！ 助かりてえのか、そうじゃねえのかはつきりしろよ！ 不満な奴は出てけばいいだろ！？ 甘つたれんじゃねえよ。助けて貰えることが当たり前に思つてんじやねえよ…！」

同時に近くにあつた椅子を思いつきり蹴飛ばしていた。椅子は教卓に当たり、かなり大きな音が響き渡つた。

涼を落ち着かせようと止めに入ろうとした晃と隼人。シーンと静まり返つた教室中の生徒達。そんな彼らの前に現れたのは、1人の兵士だつた。

「まだ早えだろ。しかも単独って、どうこうことだよ?」涼がイライラしながら言った。他の2人は黙つて兵士と向き合つていた。

“まだ早い”というのがどういう意味を示すか分からなかつたが、入り口の近くにいた未来と友香はとりあえず立ち上がり、同じく近くにいた矢野が前に立つた。未来は矢野がさりげなく庇つてくれているということに気づくのに数秒かかった。他の生徒たちが、教室の後ろいっぽいまで下がつてているのを見ると、矢野が良い奴だといつこことを再認識させられた。

「俺は今機嫌悪いんだよ！！」

涼がそういう声が耳に入つて来たのと同時に、涼たちの方へ視線を戻した未来。見ると涼は兵士に殴りかかっていた。

だが兵士はそれを軽々と交わし、右手に持つていたチップを涼の右手首についている腕輪に向かつて突つ込もうとした。

それに何とか反応し、腕を引っ込めることで何とか交わした涼。同時に左手で腕輪ごと自分の右手首を掴んでいた。一瞬遅れて涼の左手に兵士が再び突き出したチップが当たつていた。涼が左手でガードしてなかつたらやられていたらどう。

動きが止まつた兵士をすかさず両脇から抑え込む晃と隼人。隼人は同時に兵士の右手からチップを奪つていた。そこで一瞬気を抜いた涼に向かつて、兵士は両脇を抱えられたまま、涼の腹めがけて蹴りを入れた。晃たちにしつかり両脇を支えられているため、ほぼ飛び蹴りに近い蹴りだつた。涼は後ろの石壁に叩きつけられそのまま倒れ込み、せき込んでいた。

「涼！」

晃が心配そうに声を上げたのと、隼人が体制の崩れた兵士に向かって鳩尾に肘鉄を食らわせるのは同時だった。

声も出さずに倒れ込む兵士。晃はどこから持つて来たのか、手錠を兵士の両手足にはめていた。

「大丈夫？」

手錠をはめ、鍵のかかる隣の生物研究室に兵士を閉じ込めてから完璧に監禁だ。隼人と晃は涼の前にしゃがみ込んだ。涼は晃たちが出て行つてすぐに起き上がり先ほどぶつかつた壁に寄りかかっていたのだが、とても未来たちが声をかけられるような雰囲気ではなかつた。

「なんとか……」

壁に強打した腰を抑えつつ軽くせき込みながら涼は立ち上がつた。本当は全然大丈夫ではないのだろう。涼は一瞬ちらそうに顔をしかめていた。

「さんざん啖呵切つた後でやられけやつたねえ。かつこわるつ」

そんな涼の姿を見ていた晃が笑いながら言つた。

「つぬせえ」

さすがに殴る元気まではなかつたひづく滋くよつて涼は言つた。

「不運だつたよな。普段はお前が一番なのに　あいつ何者だ？」

隼人が真剣な顔をして言った。未だ教室は緊迫した雰囲気が漂つており、3人の声は教室中に響いていた。

「俺も思つた。完璧に腕輪狙つてたし、ただの兵士じゃなくね？」
やはりキツかつたのだろう、涼は立つたまま壁に寄りかかっていた。

「さすがに向こうも対策立てたんかもな」

隼人と涼が真剣に話し合っている中、晃は興味がなさそうに教卓の上に座りこんでいた。ただ涼たちもそれ以上は話し合わず、少し沈黙状態が続いた。

ふいにそんな沈黙を隼人が破つた。

「分かつただろ？　俺らだつてこれの参加者。あんたらを確実に守れるわけじゃないんだ。俺らは、あんたら1人助ける度に10万。つてことで契約されてる。好き好んで助けてるわけじゃない、金儲けの道具なんだよ、あんたらは」

隼人が静かに言った。生徒たちは誰も何も言えず、ただ下を向いているだけだった。それもそうだ。未来自身助けて貰えることが当たり前になっていた。でも違う。さつきだって涼は間一髪だった……。未来は無意識のうちに自分の腕輪を握りしめていた。自分の体が震えていることが分かつた。

金儲けの道具。それにしちゃそれを守るために随分命懸けだよね。そう思うと隼人の言葉が嘘っぽく感じた。

しばらくの沈黙。すると今まで側にした矢野が急に口を開いた。

「『めん……。やっぱ俺は出来ない。他の連中見捨てるどなんか出来ない』

矢野はそのまま2・3歩前に出ると、いつもの優しい笑顔で続けた。

「だから俺は他の連中を助けに行く」

「矢野！」「矢野君！」と言つ未来と友香の声が重なり合つた。未来はとうさに自分が矢野の腕を掴んでいることに気づいた。
「まだ逃げてる生徒はいるはずだろ？　なら一人でも多く助けるのが仲間だろ」

矢野は普段と同じ口調で未来たちに向かつて言つた。

「だめだよ。矢野君が行つても兵士には勝てないよ。捕まりに行くようなものだよ？」

友香が必死に止めていた。

もしかして友香つて……。

未来は場違いだと分かつていたが、思わずニヤリと笑わざにはいられなかつた。

「梨田はさ。他の連中助けたくないの？　仲良かつた奴とか、クラスの連中とか見捨てていいいの？　なあ、お前らもそれでいいのか？」

矢野は友香と後ろの方にいた生徒たちに向かつて言つた。

友香も生徒たちも下を向いていた。それは未来も同じだつた。

「助けたくないわけないでしょ。でも怖いの。あたしらが行つても助けられるの？　あたしらは萩原たちとは違うんだよ」

未来は思つたことをそのまま口にしていた。隼人は腕組みをしながら、涼は赤髪をいじりながら、それぞれ黙つて話を聞いていた。と、ふいに今まで教卓の上に座つていた晃が口を開いた。

「滝沢さんの言う通り。ちゃんと説明してなかつたけど、これはね。最初の4時間は兵士にも持ち場があるんだ。だから各階に4・5人しかいない。でも残りの2時間はフリー。どこに誰がいるか分からぬ。しかも、奴らは大体複数で行動してんだ。矢野君に複数の兵士を相手にしながら、他の人守るなんてこと出来る？」
晃はにつこり笑つて言つた。ただその笑みは矢野が見せたような優しい笑顔ではなかつたが。

「それは……」

矢野は言葉に詰まつていた。

「出来ないよね？ もし矢野君がやられて、兵士にこの場所が分かつたら20人以上の兵士がここに来るんだよ？ 矢野君だけの問題じゃないんだ」

小さい子供に言い聞かせるような口調だつた。言葉使いは穏やかだが、怒鳴り散らして収めようとする涼や、冷たく突き放してしまつ隼人とは違う 影のようなものを感じた。

「好きにしていいけどさー。もつオレらは助けないからね。ここには帰つて来ないでね？」

再びにつこり笑つてみせた晃。それとは反対に教室の空気が凍り付いた。

「ちょっと……どういふこと？」

未来は思わず口を挟んでいた。

「当たり前じやん。オレらのやり方が気に食わないんでしょ？ 第一、みんな守るうつなんてのが甘過ぎ。もう全体でも5、60人しか残つてないよ？」

矢野は言葉を返せなかつた。これだけ晃に攻められれば当たり前といわれれば当たり前だが

「行かないで……」

今まで黙つていた友香が急に口を開いた。

「え？」

「行かないで。ここについて。ね？」

友香は今にも泣き出しそうだつた。矢野は友香のほうを見ながらしばらく黙り込んでいた。が、しばらくすると

「分かった」

そう俯きながら頷いた。

「やつてらんねえ……」

涼はそう呟くと生物室を出て行ってしまった。

晃の話が本当なら4時間経過まであと数分。どうやって涼たちが残りの2時間を乗り切るのかはわからないが、正念場になることは間違ひなかつた。

「じゃあな。俺らは外で兵士達を迎撃つ。あんたらはバリケードでも作つて兵士達が入つて来れないようにしてくれ」隼人もそう言うと教室を出ていった。

「待つてよ！ 何で？ ここにいればいいじゃない」散々外は危険だと言つてた張本人たちが外に出ると言つている。未だには訳がわからなかつた。

「ここで複数の兵士と戦うわけにはいかないんだよ。それに」「残された晃は生物室のドアのほうに歩きながら言つた。そして続けた。

「あいつらの狙いはオレらだからね

最後に振り返り今まで通りの笑みを浮かべながらそう言つと、晃も教室を出て行つた。

第5話 守るから

「何なんだ。あの矢野つての。力ねえくせにでしゃばりやがって、結局自分大事かよ。マジ笑えるな」

晃が教室を出るとイライラしている涼がいた。

「自分に似てるからか？」

そんな涼の様子を見た隼人がからかい気味に言つた。

「似てねえよ！ あんなのと一緒にすんな」

隼人の言葉を間に受けた涼は思わず声を荒げていた。

「俺はちゃんと守りきった。戦つてもない奴とは違う」

涼が念を押すように呴いた。

晃と涼は違う高校だつたが、涼と同じ高校だつた隼人の話だと、涼は共に行動していくた何人かの生徒たちを自分が犠牲になつてまで守り抜いたらしい。訓練を受けてなくとも兵士とやり合える涼の実力にも驚いたが、何よりそこまで他人重視で考えられる涼の性格に驚いた。

「どした、ヒカル？」

涼が晃の方を見ていた。

「人は見かけによらないんだねって思つてさ」「

晃が満面の笑みで言うと、涼から無言の拳が返つて來た。

「それは晃にも言えるけどな」

隼人が笑いながら晃に向かつて言つた。

「ホントだよ。俺絶対ヒカルとは口喧嘩しねえ

涼も笑いながら追い討ちをかけていた。

「ひどいよ。オレそんな冷たくないよ」

晃も笑っていた。いつも笑つてれば自分も相手も嫌な気分になることはない。そう思い生きていくうちに、嘘の笑みを浮かべることに

慣れてしまつた。ただそんな晃でも3人でいるときは本当に笑うことが出来る　だからこそずっとこのままでいたかった。

「……オレたち。逃げ切れるかな？」

生物室が騒がしくなつていた。おそらく机などを移動してドアを封じているのだろう。

だがそれと反対に晃たち3人は急に静かになつていた。

「大丈夫さ。いつも通りやれば逃げ切れる」

涼が晃の頭をポンと叩きながら言つた。毎度そうだった。今度こそダメかもしれない。そんな不安を抱えながら何度も生き抜いて来た。それは今回も例外ではなかつた。

「そろそろだな」

隼人がポケットから携帯を取り出しながら言つた。と、ふいに後ろのドアが開く音とともに1人の生徒が身を乗り出していた。

「おい、何やってんだよ？」

バリケードとして使われている机の上に乗り、わずかに開いたドアの隙間から顔を出しているのは未来だった。

数分前。生物室内では晃が教室を出て行つても誰も動こうとしなかつた。何となく気まずい雰囲気に包まれ、どうしていいか分からなかつたといったほうが正解だつた。

「とにかく機動かそうか？」

そんな空氣を断ち切つたのは未来だった。

その言葉につられて教室にいた生徒たちは全員で机や棚を動かし、

1つしかない入り口をふさぎ始めた。

未来は机を動かしながら考えていた。涼たちはどうなるのだろう。あと2時間、20人以上の兵士から逃げ切らなくてはならない。そ

れは可能なのだろうか？

「あいつらの狙いはオレらだからね」

ふいに晃の言葉を最後に残した笑みが頭に蘇ってきた。じつして入り口を塞いでいる今、もう彼らに会うことはないのだろう。自らが囮となり自分たちを助けるつもりなのだろう。そんなことでいいのだろうか。自分はこのまま助けて貰うのが当たり前でいいのだろうか　違う。いいわけないじゃない。そんなのだめだよ。

気づくと未来は既に積み上げられた机の上に飛び乗っていた。

「未来ちゃん！？」

友香が驚きの声をあげていた。未来は2段重ねになつた机の隙間を抜け、既に棚で塞がれていた入り口の棚を無理やり動かし開けたあまりに突然の出来事で誰も止める入る者はいなかつた。

「何しに來た？」

涼が怪訝そうな顔で聞いてきた。

「あんた達　捕まらないよね？ 戻つてくるよね？」

未来は息を切らしていた。とりあえず飛び出してみたものの、相手を心配する言葉しか頭に浮かばなかつた。

「当たり前だろ」

涼は即答した。隼人も晃もわずかに微笑んでいた。それは肯定の意味を表す意志のこもつた笑みだった。

「あ、これ渡すの忘れてた」

涼がポケットからなにやら黒い物体を取り出し、未来に押し付けてきた。その時わずかに触れ合った手がとても温かかった。

「何これ？」

渡されたものは、小型ラジオのようだった。スピーカーのようなものと、ボタンが一つついているだけの簡単な仕組みの機械だった。「無線だよ。何かあつたら連絡くれな。そのボタン押しながら話せば俺らに繋がるから」

涼が未来に背中を向けながら言った。

「俺たちの会話も全部スピーカーから流れてくるが、必要な時はこっちから呼ぶからそれ以外は全部無視してくれ」

隼人が続けた。見ると涼たちも同じものをポケットから出していった。涼たちが持っているものはイヤホンと小型マイクがついており、3人とも右耳にイヤホンを、制服の襟に小型マイクをつけていた。

「戦闘中だつたら無視するけど、気にしないでね。誰かは反応するからさ。いい？ 関係ないときには全部無視してね」

晃が念を押した。ただその顔にはいつもの笑みはなく、真剣な表情だった。

「おら。はやくドア閉めろ。ちゃんと塞いどけよ？ 時間稼ぎぐらいにはなるから」

涼が迷惑そうに言った。

「ありがと。絶対帰つて来てよ」

未来がそう言つたのと同時に、下の方から複数の兵士が上がつてくる音がした。

「当たり前だつて言つてるだろ？ んな弱くねえよ」

涼がそう頷いたのを確認してから未来はドアを閉めた。いつの間にか隣に来ていた矢野と協力し、重い棚でドアを完全に塞いだ。

「びっくりさせんなよ。ご乱心かと思いましたよ」

机の間をすり抜けて戻つた瞬間、笑いながら矢野が言った。

「残念ながら正気です」

未来はどつと疲れが押し寄せてくるのを感じ、スカートなのにも関わらずその場に寝転がった 下にハーフパンツはいてるけどさ。その時ドアの向こうから物音がした。同時に和やかな雰囲気だった教室に一気に緊張が走った。

だがそれも長くは続かず、複数の人間が遠ざかる音と共に、静かになつた。

「滝沢さん。残つてる兵士はいる？」

突然晃の声が先程渡された無線機から聞こえた。

「え、多分いないよ」

外が見えるわけではないが、物音一つしない廊下に複数の兵士がいるとは到底考えられなかつた。未来は多少慌てながらも、先ほど渡された無線機のボタンを押しながら言つた。

「そつか。分かつた」

晃がそう言つと無線は切れた。晃の息は荒く明らかにどこかの廊下を走つてゐるようだつた。彼らが持つてゐる無線機は作りが違うのだろうか。とてもんびり無線機を取り出して通話ボタンを押すことが出来る状況ではないように思えた。

無線が切れてからは誰も何も言わず、生徒たちは机がなくなつた教室で椅子に座つたり、床に座つたりしてゐた。と、ずっと立つていた矢野がふいに口を開いた。

「俺。かつこわりいけど、ここに奴らが来たら死ぬ氣で守るから。ここにいる仲間は俺が守るよ。だから」

「

矢野がそれ以上言つ必要はなかつた。教室中にいた生徒たち全員がニヤニヤしながら矢野の方を見ていたからだ。

「あんま1人で抱え込むなよ。俺だつて力ぐらい貸すつて」

「そうだぞ。全員で戦えば兵士の1人や2人余裕余裕」
3年生の男子生徒が言った。

「大丈夫だよ。みんなで守ろう」

友香が座つたまま矢野を見上げていた。矢野は涙目で「うん」と頷いた。

第6話 確実に迫る危機

一方涼たちは3人バラバラになつて逃げていた。

生物室から遠く、戦闘が出来るぐらいの広さがあり、出入り口がいくつかある。その条件を満たすのは第一体育館しかなかつた。元々体育館が2つあるこの学校では、第一体育館は兵士たちに占領されていたが第二体育館は開放されていた。その分他の生徒も紛れ込んでいる可能性もあるが、そんなこと言つてられなかつた。できるだけ敵を減らしつつ、体育館に逃げ込む。

これが今回3人で決めた作戦だつた。

とは言つたものの 涼は逃げながら考えていた。3人が唯一兵士より圧倒的に勝つているものはスピード。その走力差のためか涼と兵士の距離は10メートル程離れていた。んなこと単純に出来たら誰も苦労しないんだよな。

体育館に逃げ込んだところで追い詰められれば終わりだ。涼たち3人が同時に相手できる最高人数は10人。となると1人辺り3人程度しか体育館まで一緒にできないことになる。そのためか毎度作戦は決めるものの、作戦通り体育館まで逃げ込むのは終盤、大体終了30分前ぐらいまでは1人で敵を減らさなくてはならなかつた。

「さてと……」

涼は立ち止まり軽く息を整えた。丁度3階の生物室の真下辺りに来ていた。隼人は一号館に逃げた。ヒカルは下の階に逃げた。ここまで来れば3人が出くわすことはないだろう。ごちゃごちゃになると逆に危険なため、3人は出くわさないようにしていった。

涼が立ち止まって2秒としないうちに、兵士たちは追いついていた。

その数6人。

兵士たちは多少息が乱れていたが、一瞬にして涼の周りを取り囲んだ。と、6人同時に涼に襲い掛かつて来た。だが涼は兵士たちが攻撃してくる一瞬前に、正面から攻撃してきた兵士の横をすり抜け、兵士の輪を抜けていた。同時に廊下に響き渡る鈍い音。それは何人かの兵士が相打ちしたことを知らせていた。涼はそのまま振り向きざまに反動をつけ、後ろから殴りかかってきた兵士の顔面に回し蹴りを食らわせた。確かな手ごたえと共に、先ほどより幾分大きな鈍い音。目の前の兵士はそのまま後方に吹っ飛んでいた。幸運にも真後ろにいた兵士も巻き込み、2人の兵士が床に倒れこんだ。だが、威力の高い回し蹴りで体勢が崩れた涼に向かつて別の兵士が殴りしかつてきた。頬の辺りに熱い衝撃を感じると共に押し寄せる痛み。涼は口の中が切れるのを感じながらも何とかその場に踏みとどまった。

やつぱきついな。

先ほど蹴りを食らわせた兵士が苦しそうな顔をしながら立ち上がるのを見ながら涼はそう思った。やはり一撃で倒してくれるほど甘くないらしい。

分が悪いと判断した涼はとりあえずぐるっと後ろを向くと、そのままトップスピードで校舎を駆け抜けた。

殴られた頬を触ると、ちりつという熱い痛みが走った。既に腫れ始めているのは感覚で何となく分かつたが、たいしたダメージではない。

殴られたのが腰じやなくて良かつた。

強がっていたものの、やはり先ほど生物室で蹴りを食らった時に強打した腰の痛みは消えてなかつた。集中していれば痛みはないが、攻撃を食らうのはきつい。

ちらつと後ろを振り返ると、予想通り6人の兵士たちが後を追つて

来ていた。だが相打ちした兵士や涼にやられた兵士は動きが遅くなっているため、先ほどと同じスピードで追つてきているのは3人だけだった。

これを何度も繰り返し兵士を気絶させるか巻くしかないよな。

既に多少息が切れて来ている涼はそう思いながら階段を上っていた。現在の時刻は2時。あと1時間半。それは確実に終了に近づいて来ていると共に、確実危険が迫っていることを示していた。

第7話 そんなはずはない

「どうだ？ 大丈夫か？」

無線を通して隼人の声が聞こえた。晃は後ろを振り返り、兵士との距離が離れていることを確認すると、マイクのボタンに手を伸ばした

「晃たちの無線は小型マイクの隣に通話ボタンがついていた。

「こちら晃。まだ大丈夫だよ」。何かいつもより兵士少ない気がする

「マジで？ 僕、何か大変なんだけど

「作戦変えるか？」

いつもながら隼人の息はほとんど乱れていなかつた。

「なーに言ってんだよ。そこまできつくねえよ

涼が笑つて いる顔が晃の頭に浮かんだ。

「そうか。んじゃあな

お互いのんびり話していられるほど暇ではない。三人は同時に無線を切つた。

晃はまたちらつと後ろを振り返つた。まだ一度も追い付かれてないため、戦闘は行われていなかつた。

それでも兵士たちは一定の距離を保ちながら追つて来ており、晃の体力も確実に減つていた。

戦いたくないんだよな。

晃は一階へとつながる階段を駆け降りながら思つた。ここまで遠回りをしながら階段を降りて來たが、一階まで來た今、外しか逃げ道がなかつた。しかし外と言つても、校舎の周りか校庭しかなく、下手をすると両方から挟み打ちされる危険性があつた。

戦いたくない。戦えばどちらかは必ず負けるから。かといって、人

を傷つけたくないほどお人よしでもなかつたが、負ければ地獄行き
という賭けに勝ち続けることが晃にとつてプレッシャーであつた。

まあ、そんなことも言つてられないよね。

晃は一階にある職員室に入るとそのままドアを閉めた。もちろんそのままやり過ごうなどとは思つてなかつたが、一瞬でも時間稼ぎになれば良かつた。

晃が何か対策を考える暇もなく、兵士はドアを蹴り破つて入つてきた。

四人の兵士たちは晃の姿を確認するなり、同時に殴り掛かってきた。晃は当然のことのようにそれを交わすと、右側にあつた机に飛び乗つた。一人の兵士がそれを予想して足を掴もうとして来たが、晃はたまたま机の上にあつた重しとして使っていただろう石を軽く蹴り上げると、そのまま思いつきり兵士の顔面目掛けて飛ばした。石を飛ばされた兵士は、額から血を流しながらその場に膝をついた。だが晃が直接攻撃してくると予想していたのであらう別の兵士が、机に飛び乗りそのまま突つ込んで來た。それを机から飛び降りて何とか交わした晃。体勢が崩れていたらモロに食らつていただろう。晃が床に飛び降りると同時に、勢いが止まらなかつた兵士も机から派手に落ちていた。咄嗟に田の前にあつた椅子を掴みそのまま投げると調度起き上がるとしていた兵士の腹に直撃し、兵士はそのままつづくまつたまま動かなくなつた。

あと三人……

多少息を切らしながら立ち上がつた晃。残りの三人の兵士たちとはお互い一步では間合いに入れない距離を置いていたので、立ち上がつた瞬間攻撃されることはなかつた。

石をぶつけられ額が切れた兵士は、派手に出血しており、片方の目

はつぶられていた。一いちらは楽勝だろ？。しかし残りの一人は息一つ乱していなかつた。

どうしようか一瞬迷つた晃の耳に、聞き覚えのある声が飛び込んで来た。

「ねえ！ 生物室の外に兵士がいる！ ビーしたらしい？」

「え……？」

晃は思わず声を出してしまつた。そんなはずはない。今まで兵士たちはオレたちのみを狙つていた。出来るだけ多くの戦力をオレたちを捕まえることにかけるためだ。それでも毎回追いかけてくる兵士の数は四・五人。それは今回もあまり変わってはいない。となると普段残つてる生徒を捕まえてる兵士が生物室に行つたのか。

とにかく行つてみますかね。

晃がそう思つたのと、腹の辺りに強い痛みを感じ後ろへ吹つ飛ばされたのは同時だつた。

それもそのはず、無防備になつていた晃を兵士たちが見逃すわけなかつた。

幸い後ろに障害物がなかつたため、涼のように一重のダメージを受けて済んだが、床とのあいだに生じた摩擦熱で手足を擦りむいたようだつた。

だが晃は兵士たちが仕掛けて來た一撃目を床を転がつて交わし、そのまま入ってきたドアと反対のドアから職員室をあとにした。

第8話　侵入者

涼たちが去つてから30分以上経過していた生物室。何分か前の涼たち三人の会話は未来たちにも聞こえていたが、特に口を挟むような内容ではなかつたので、未来は何も言わなかつた。
それから数分した後のことだつた。

ドン。と言ひドアを叩く音が教室中に響き渡つた。

一瞬にして静まり返る教室。未来は涼たちに助け出された生徒がドアを叩いているのだと思った。そうであつて欲しかつた。
再び叩かれるドア。それは叩くと言ひより、ぶち破ろうとしているようだつた。同時にそれは未来の想いは願望にすぎないことを告げていた。

「ビ、ビーしよう?」

ずっと隣にいた友香が小声で未来に話しかけて來た。
すっかり畠然としてしまつていた未来だつたが目の前に置いてあつた無線を手に取ると、すぐさま通話ボタンを押した。

「ねえ! 生物室の外に兵士がいる…ビーしょ?」

言つてからもう少し自分を落ち着かせてから言えれば良かつたと後悔した。

少しの沈黙。教室中の生徒たちが無線に注目していた。
誰も反応してくれないんじやないか。と未来が不安に思つた時だつた。

「悪い。反応遅れた。兵士何人だ?」

隼人の声だった。

「分かんない。でもさつきより静かになつた」

え、静かになつた……？

未来は自分の言葉に自分で驚いていることに気付いた。何で静かになつてるの？ 未来がドアの方へ視線を戻した時だった。

ガラスが割れる音と共にドアの上についている窓から兵士が侵入してきた。同時に響き渡る女子生徒の悲鳴。兵士たちは未来たちが必死で作り上げたバリケードの隙間を軽々とくぐり抜け、あつという間に生物室内に侵入してきた。

「おい！どーした！？」

「滝沢さん？」

隼人に続いて晃の声も聞こえた。

兵士の一人は騒いでいる女子生徒をみると真っすぐに突っ込んで来た。何も出来ずにそれを呆然と眺めていた未来。だめだ、やられる！ 未来がそう思つた時だった。

何か物凄いスピードで白い物体が飛んで来たかと思うと、兵士の額に命中した。同時に響き渡る鈍い音。兵士は、「うつ」と言う呻き声と共にその場に崩れ落ちた。一瞬遅れて床に落ちる野球の硬球。ボールが飛んで来たほうを見ると、先ほど矢野を励ました3年生の野球部員が投球した後の体勢のままニヤリと笑つてみせた。

「完璧。もうちょいマジで投げても良かつたな」

そういえばあの人 未来はボールを投げた野球部員が、県内でもそこそこ有名な投手であることに気付いた。確か名前は岩井。だが入ってきた3人のうち、残された2人の兵士たちは手前にいる生徒を無視して、真っすぐ岩井のほうへ向かった。奴らは強い奴

から潰す主義らしい。

ボールは1つしか持つていなかつたらしく、明らかに、やばい、と言いたげな表情を浮かべた岩井だが、ふいに無視された集団の中にいた矢野が後ろから殴り掛かっていた。

「おい、何があった？」

隼人の声で未来の視線は兵士から無線へと移った。
「兵士が中に入ってきた。兵士の数は三人。でも今は一人になつてゐる」

未来の現状報告を聞いた晃が驚いたように言った。
「こんな短時間で兵士氣絶させられる人いるんだ〜。へへつ。オレらいらないな〜」

「そんなことないじゃない！ お願ひ。誰かやられる前に来て！」
今はもう1人の野球部員を加わり、3対2で戦つていた。他の生徒は遠巻きに見ており、手伝つ氣はないようだった。

「1分で行く」

隼人は短くそう言うと無線を切つた。

「冗談、冗談。オレもすぐ行くから」

晃もそう言うと無線は切れた。

未来はちらつと頭の隅で涼が一切会話に参加しなかつたことを気にしたが、戦闘中なのだろう。と無理やり自分を説得せせ、視線を兵士たちのほうに戻した。

矢野たち3人は掃除用のモップを使い兵士たちを戦闘を繰り広げていた。兵士たちはゆつくり戦うつもりなのか、全力で戦つていよいのは明らかだつた。反面、矢野たちは兵士たちが時々繰り出してくる力をセーブした攻撃に避けることすら精一杯と言つた感じで、一応攻撃はしているものの、あつさり交わされていた。やはり先ほどの不意打ちは幸運中の幸運だつたのだろう。矢野たちがやられるのは時間の問題のような気がした。

「どうしよう……」

未来は誰に言うわけでもなく1人で呟いた。思わず友香の顔を見つめたが、友香もどうしていいか分からぬようで、困ったような顔で未来のほうを見るだけだった。

どうすればいい？ 今自分が矢野たちの間に入り込んでも邪魔になるだけ。それは充分分かつていた。でもただ見ているだけでいいの？ 未来が悩んでいると、兵士の1人がいい加減うんざりした、とも言いたげな顔で軽くため息をついたかと思うと、一瞬で矢野の間合いに入りこんだ。長いモップを持っている矢野は懐に入り込まれれば何も出来ない。兵士は飛び込んできたままのスピードで矢野の腹に向かつて拳を突き出していった。例え素手だとしても何も出来なかつただろう。

矢野は無意識に口から出た「がはっ」という声と共にその場に崩れこみ激しくむせ込んでいた。その場に崩れこんだため、兵士が繰り出した全ての力が矢野の体内に吸収され、矢野は今にも意識を失いそうだった。

「矢野っ！？」

岩井が咄嗟に駆け寄つたのがいけなかつた。先ほどの兵士は冷たい目で岩井のほうに視線を向けると、その場から回し蹴りを繰り出した。岩井はボキッという嫌な音と共に左腕を思い切り蹴られていた。思わずうめき声を上げながら腕を押さえその場に膝をついた岩井。兵士はそのままの顔めがけて蹴りを入れようと踏み出したのが分かつた。

だが、岩井の顔に兵士を足がめり込む前に、それまで遠巻きに見物していた何人かの生徒が後ろから兵士に飛びついていた。全くの不意打ちで思わずバランスを崩した兵士。未来と友香もその場から飛び出し、それぞれ岩井と矢野のほうに向かつた。

「全員で戦うんすよね。すみませんでした」

兵士に飛びついた男子生徒が岩井をかばうように岩井の前に立つと言った。それを聞いた生徒たちは全員兵士と向き合っていた。2人の兵士は先ほどとは違い本気で戦う気になつたらしく、見下すような視線を未来たちに向けていた。ふいに先ほど矢野たちに攻撃してきた兵士とは別の兵士が動き出した。思わず恐怖に身を縛られた生徒たちはその場から逃げることも戦うことも出来なくなつた。それほど先ほどまで戦っていた兵士とは別人のような殺氣を放つていた。

動くことも出来ない生徒の1人の顔面めがけ、兵士が拳を突き出す。今日何回目かの鈍い音が教室中に響き渡る　未来はそんな錯覚を見た。

だがそれは錯覚に過ぎず、兵士が伸ばそうとした腕はいつの間にか教室に入ってきた隼人によつてがつしり掴まれていた。

「主役登場～」

続いて晃も教室に入つてきた。未来は自分を含めた生徒たち全員の顔が安堵の笑みでいっぱいになるのが分かつた。

第9話 本当の強さ

「はいはい。下がつて下がつて」

晃は目の前に殺氣を放っている兵士がいるのに、まったく気にしないといった感じで生徒たちのほうに向かつてにつこり笑っていた。その能天氣とも取れる態度が生徒たちの恐怖を取り去った。言われるがままに教室の後ろのほうに下がつた生徒たち。未来は左腕を押さえたままでいる岩井を気づかい手を貸そうとしたが、「大丈夫。ありがと」と言い断られた。見た目ではよく分からないうが、あれだけ強く蹴られれば骨が折れていてもおかしくないはずだつた。大会が終わつていたことが不幸中の幸いだらう。

一方矢野は2人の男子生徒に肩を貸されながら何とか教室の後ろまで下がつていた。相変わらず苦しそうに呼吸をしている矢野。そんな矢野を友香が心配そうに見ていた。

「たいしたもんだな。1人もやられなかつたのか。というよりあんたらも落ちたな」

隼人はどことなく口元に笑みを浮かべており、その横顔がかなり頼りがいがあるようになつた。

晃も隼人と少し離れた位置で、もう一人の兵士と対峙していた。兵士も迂闊に飛び込んで来ることはなく、静寂した空気が流れた。だがそんな静寂を破つたのは、廊下から聞こえた何人かの人間の足音だつた。

その足音に気を取られドアの方に視線を向けた一人の兵士。向き直つた時には目の前に晃と隼人がいた。晃が繰り出した飛び蹴りと隼人が繰り出した顔面へのパンチは正確に兵士にヒットした。先ほどまで一発も当たらなかつた矢野たちの攻撃が嘘のようだつた。晃の攻撃を受けた兵士は膝をついたものの、すぐに立ち上がつてい

たが、隼人に眉間に辺りにパンチを食らつた兵士はその場に倒れ込んでいた。

だが、先ほどの足音の主 複数の兵士が教室に入つて来ると隼人は軽く舌打ちをした。その音がやけに教室中に響き渡つたため、一瞬気まずそうな顔をした晃が隼人のほうに両手を合わせながら口を開いた。

「ごめん！ 全員巻けなかつた」

「いや、悪い。俺のが多く連れて来てる」

隼人は苦笑いに似た表情を浮かべながら言った。

次々と教室に入つて来た兵士たちは、教室の状況を確認するなり、隼人たち一人を取り囮んだ。二対一の状況から二対五になつていて。それを見た二人の空気が一気に変わつたのが分かつた それは未来が生物室を出ていく涼たちに会つた時の二人の空氣に似ていた。先に飛び出したのは晃だつた。晃は正面にいた兵士の顔面に向かつてパンチを繰り出した。不意打ちでも何でもない攻撃はあつさり交わされ、正面にいた兵士はバランスが崩れた晃に向かつて足をかけていた。ここで晃が倒れ込めば、そのままリンチされていただろう。だが、晃は先読みしていたのか、兵士の足を交わしながら地面に手をつきその場に逆立ちするとその勢いのまま、別のほうから飛び出して来た兵士もろとも両方の足先が兵士の顔面に食い込んでいた。すかさず体勢を整えた晃は何歩か下がり兵士と距離を取つた。だが、横から来た別の兵士を見るなりその顔に焦りのようなものが浮かぶのが分かつた。

だが反対側から来た隼人によつて兵士が突き出した拳は交わされた。がつ、という音。何故か攻撃した兵士のほうが顔をしかめていた。よくよく見ると、隼人は腕輪を使い拳を受け止めており、兵士の第一関節が隼人の金属製の腕輪に綺麗に当たつているのが分かつた。

凄い……

未来は圧倒されていた。決して余裕ではないのだろう。二人共ここ

まで走つて来た時の疲労がプラスされ、静まり返つた教室に晃の荒い呼吸音が響いていた。がしかし、確實に数の差を埋める戦いをしている。実際兵士たちの動きが鈍くなっているのが分かつた。

未来はふと後ろを振り返り矢野のほうを見た。矢野は床に寝転がつたまま、目の上に腕を乗せていた。意識があるのかは分からなかつたが、骨が折れているかもしれない岩井よりも、強い力で攻撃を受けたのだろうと晃のことを踏まえると、大丈夫なのだろうか。と一瞬不安になつた。

がたつという椅子がズレるような音を聞き、再び晃たちのほうに視線を戻した未来。見ると、三人の兵士が床でうずくまつている中、二人の兵士たちが入つてきた入口から外に出ていくところだつた。追おうとした晃を隼人が無言で制した。

「いいの？」

しんとした教室に晃の声が響き渡つた。

「後始末あるだろ。それに罠かもしれない」

言いながら教卓の中から手錠を取り出し、何時間か前同様手際よく兵士の自由を奪つていた。

「大丈夫？」

数分で作業は終わり、足で教室の隅に兵士を追いやると、晃は矢野のほうに近付き言った。大分落ち着いて来ているものの、まだ息が弾んでいるのが分かつた。

「肋骨折れてるかもしれないな。血とか吐いてないよな？」

隼人が言い、すぐさま矢野の隣にいた友香が頷いた。

「『めん……俺、役に立たなかつた……』

矢野が目から腕を外し、天井を見つめながら言った。しばらく誰も何も言わなかつた。迂闊に「そんなことない」などと綺麗事を言つ

てはいけない気がした。

だが、そんな沈黙を晃が破つた。

「ねえ、ホントの強さって何だと思つ?」

晃は立つたまま、矢野のほうを見ていた。

「……守りたいものを守る力のこと」

少し間を置き、矢野が僅かに晃のほうに顔を動かしながら言つた。

「力ねえ……」

晃はため息混じりとも取れる調子で言い、続けた。

「オレらの中で、体力的にも技術的にも一番強いのは隼人なの。でも、三人で勝負すれば涼が勝つ。何でだと思う?」

誰も答えるどこが出来ず、何となく氣まずい雰囲気が流れた。なんか言わなきや、そう思つた未来は咄嗟に頭に浮かんだことを口に出した。

「容赦しないから?」

同時に隼人が「ははっ」と笑う声が響いた。

「確かに容赦はしないけどさー」

晃も笑っていた。

「じゃあ何でなの?」

率直に考えたとは言え、馬鹿にされたような気がした未来はイラッとしてしながら聞き返した。

「涼は精神的に一番強いんだよ。だから力で負けてても勝てる。最後の最後で一步踏み出せるかは力じゃないんだよ。本当の強さは“気持ち”なんじゃないかな」

晃は矢野を見ながら言つた。しかしその日は遠くを見つめているようだった。

「確かに。力なんてのは、いくらでも手に入る。お前は気持ちがあるんだから、充分強いさ」

「ま、涼は認めないだろうけど」

隼人と涼が口々に言つた。先程までの緊迫した空気が嘘のよつこ、穏やかな空気が流れていった。

「さてと、そろそろ行くね」

ふいに晃が口を開いた。

「え？」

てっきりこのままここにいると思い込んでいた未来は思わず声を出していた。

「言つたでしょ。」「じゃ戦いについて。大丈夫、また危なくなつたら帰つてくるよ」

晃は久しぶりの笑顔で未来に向かつて言つた。

にしても、あと30分を切つていても、わざわざ困になる必要があるのだろうか。未来はそう思いつつ、曖昧な返事とともに頷いていた。

そして晃たちは、入つて来たときと同じように身軽に机を飛び越え、外に出て行つた。ただ、何となく兵士と戦つていたときとは別人のような頼りない背中が、未来に不安を残していた。

第10話 強がり

あと30分切ったな……。

涼は廊下から見える教室の時計を見ながら思つた。既に息は上がりしており、体力的にしんどくなつて来ていた。

嫌な予感すんだよなー

後ろから追つてくる兵士は4人。あれから何人か倒したもの、気付けば新たな追つ手の兵士が増えている状態が続いていた。生物室に兵士が来たことと言ひ、確實に何かあるはずだった。

そーいや、ヒカルたちに連絡いれてねえや。

そう思った涼は角を曲がりながら、無線に手を伸ばした。が、目の前にいる人物を見た途端、その姿勢のままその場に立ち尽くした。まさに絶句状態の涼に、後ろから来た兵士たちが一斉に飛び掛かつていた。

「……」

廊下にうつ俯せにたたき付けられ、一瞬のうちに手足が兵士たちに押さえ付けられてもなお、涼は目の前の人物から目を反らすことはなかつた。

「どうした？ “最強の高校生”は、ハッタリか？」

そんな涼を見下すような視線で見つめながら声を出したのは、涼たち三人が兵役時代に訓練を受けていたときの長官 丸山哲治だった。

「初めて聞いた兵士の声があんたとは……。何が狙いなん？」

確か丸山ほどの地位にいる人間がこんなとこに参加することは出来ないはずだった 新人に近い兵士だらけだからこそ、涼たちは互角以上に戦うことが出来るのだった。

「ただの観戦だよ。本当は参加してもよかつたんだが、さすがに許可が下りなくてな。大事な教え子がどれだけ強くなつたか見届けに来ただけだ」

「へえ。てっきり俺らを外に出した責任問われて降格したんかと思つたわ」

精一杯の皮肉を込めて涼は言った。

「ふつ。強がるものい加減にしたらどうだ？　その派手な頭といい、滑稽だぞ」

丸山は今度ははつきりと涼を見下していた。

簡単に挑発に乗りやすい涼はピクッと指先が動いたものの、それ以上体が動かせないことに初めて気付いた。同時にそれまで存在する感じさせなかつた兵士たちの力の大きさを改めて実感していた。事実、指先が痺れて来るのが分かつた。

強く抑えすぎだつての。

心中で軽く舌打ちしながら涼は思つた。

「ああ。強がりだよ。怖くてしようがねえよ。だがな、あんたらみたいに上から見下ろしてると、いつか足元から派手にすつころぶぜ」言いながら何とか腕輪がついてる右手だけでも抜け出せないかと思つた涼だつたが、さすがに人数差がありすぎるため、全く持つて動かせなかつた。

「試してみるか」

そう呟いた丸山。涼はどういう意味か分からず言葉が返せなかつた。

「お前らは下がつてろ。市川と武村は生物室周辺にいるはずだ。そつちの援護をしてやれ」

丸山の命令に従い、涼から離れた兵士たち。涼がとうさんに丸山から離れ、体勢を整えた時にはもう、廊下の遙か先に兵士の姿にあつた。ちつ、と軽く舌打ちした涼だつたが、丸山のほうに向き直つた時にはもう、丸山の姿は目の前にあつた。

やつべ。

とうさんに腕で体を庇つた涼だつたが遅すぎた。丸山の拳は涼の腕に当たつたものの、涼は受け止めることができず、骨まで伝わる鈍い痛みと共に、吹つ飛ばされていた。

慌てて立ち上がり、追い討ちをかけてきた丸山に向かつて突つ込ん

でいた。いきなり間合いを縮められたため、丸山の攻撃は不完全燃焼で終わった。

そのまま丸山を突き飛ばすようにしながら間合いを取り、反動をつけ丸山に向かつて飛び蹴りを食らわしていた。だが、涼の蹴りは簡単に受け止められ、体勢が崩れた涼の腰に丸山の踵が食い込んでいた。

「つ……」

重力による勢いに丸山の力が加わった踵落としを食らった涼は声にならない声を出しながらその場にうずくまつた。

「腰を庇いながら戦つてるのがバレバレだぞ」

既にゼエゼエと息をしながら氣力だけで何とか立ち上がった涼だったが、立つてることすらしんどく、思わず壁に手をついていた腰の痛み以外にも、これまで兵士たちに食らった攻撃などが加算され、全身から痛みが伝わって来ていた。

「良かつたな。私は第三者だからチップは持っていない。もう一度兵役をする心配はないぞ」

嘲笑と思われる笑みを浮かべながら丸山は言った。

「るせえ……元から戻る気ねえよ……」

息が荒いせいか、出て来る言葉も弱々しかつた。

「萩原。我々が本気でお前ら三人を捕まえられないでいるとしても思つていいのか？」

涼は何も答えなかつた。出血しているわけではないのに、貧血状態のように頭がぼんやりしてきていたのが、自分でも分かつた。

「これがその答えだ」

丸山の声が近くで聞こえたのと同時に腹の辺りに感じる鈍い痛み。涼は既に自分が立つてているのか、倒れているのかすら分からなかつた。ただ丸山から後頭部直撃の攻撃を食らいつと、自分の意識が飛んでいくのが分かつた。

負けたくねえ……

そう思ったのと同時に涼の意識は完全に途絶えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5968b/>

Sabotage

2010年10月20日17時52分発行